

II. 伝統的生活と慣行

白山麓の伝統的生活については、尾口・白峰各村史やその他報告書で度々報告されており、その全容は大体明らかになっている。ここでは、冬の生活と伝統的慣行を中心に山の生活を紹介する。なお、調査対象地は白峰村字白峰、同字桑島、尾口村字尾添、吉野谷村字中宮の4か所である。なお、文中で白峰とあるのは字白峰のことである。

1. 冬の生活

(1) 雪とのかかわり

白山麓は日本有数の多雪地であり、冬の生活を雪抜きに考えることはできない。多雪地であるがゆえの工夫や助け合いといったことが見られる。ここでは雪と住民生活とのかかわりを除排雪を中心に紹介する。

①除排雪

a. 屋根（人家）

一冬の屋根雪の除雪は平年で3～4回（中宮・尾添・桑島）、5回前後（白峰）である。ただし桑島ではダム水没による代替地移転（昭和52年）前、つまり旧桑島にいたときは年2～3回と少なかった。移転後は流雪溝が整備されたために雪降ろしをより多くするようになった。近年の豪雪時を例にとると、三八豪雪では4～6回（中宮・桑島）、7～8回（尾添）、10回前後（白峰）、五六豪雪では、4～5回（中宮）、7～8回（尾添・桑島・白峰）であった。ただし平年及び豪雪時とも家によって除雪回数はかなりバラつきがあり、あくまでも前記の回数は一つの目安にすぎない。

次に、屋根雪の除雪を行なうべきかどうかの判断であるが、中宮・尾添では屋根雪の積雪が1m、桑島では1間(1.8m)又はふすまがしまりにくくなった時（ダム移転前）か1m前後（ダム移転後）白峰では1.5m（コシキの長さと同様）から2mくらいを、一応の目安とする。ただし、雪の軽い重いによって当然除雪の判断は変わる。

b. 橋

中宮では区長が割り当てて人選をし、1回4人（1軒1人）で一冬4回くらい。白峰も区で行ない、主に冬期橋を通行する人が除雪した。桑島では昭和30年代ころまで入札による請負、40年代からは特定の請負者。尾添は廻り人夫が3～5人で、新雪1mを除雪の目安とした。

c. 神社・寺

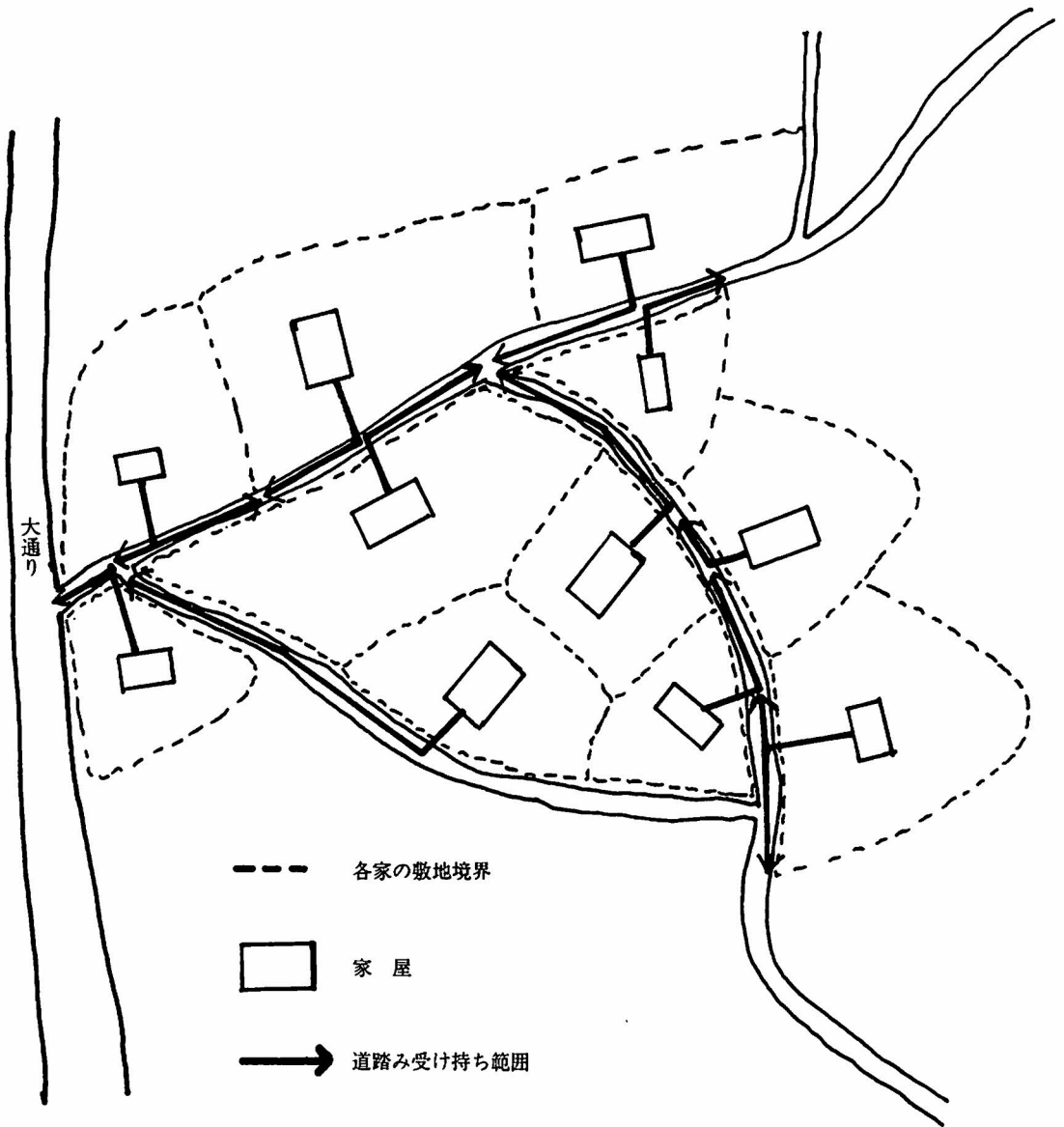
中宮では、神社は村の人夫出し（5人/回）で一冬4回くらい、寺（道場）は各門徒が一斉に行なった。（家道場2軒、専用道場2軒）。尾添では廻り人夫で3～5人。桑島では、氏子青年会が神社の除雪管理をし、寺は各門徒が平年1回（三八豪雪時2回）行った。白峰では寺の壇家から1軒1人出た。壇家総代が除雪の時期を決めた。

d. 学校

中宮では、一冬3回くらい、村の人夫出しで行ったのに対し、桑島・白峰は生徒の父兄が行った。

e. 道踏み

総じていえるのは、各家の敷地内は各々の家の責任で道踏みをしたことである。中宮では隣家の入口まで、尾添では大通り（県道）に向かって出られるように（別図）、桑島では寺に向かって家の前の道を踏んだ。朝の5時半～6時ころに始め、大体30分位で終わった。



図II-1 尾添における道踏み受け持ち範囲

②雪にかかわる生活用具

a. 除排雪器具

白山麓の除雪器具の移り変わりをみると、大体においてコシキ（コシキダ）→スコップ→スノッパ一となっている。コシキは白峰村三ツ谷（現在は無人集落）が大産地となっていて、明治以前からも生産されていたが、明治以後鉄道建設の進展とともに、レールの除雪用に需要が伸びた。もちろん一般家庭でもよく使われた。材料はブナ（大日川方面ではハウノキなど）で、大きさによって用途がわかれていた（図版写真）。この他に、13尺（約 3.9m）のナガコシキがあり、神社の屋根雪除雪を下から行うために使われた（なぜなら、神様の社の上に昇ってはいけなかったから）。

このコシキは大体昭和初期ごろまで除雪器具の主役として使われたが、鉄製スコップの登場とともに

にその役割が段々低下した。尾添では昭和11年の尾添発電所建設工事を契機にスコップが普及した。しかしながら、軒先の雪割りや屋根雪除雪（スコップだと瓦が割れやすい）にはコシキが重宝され、白山麓では現在でも使っている家が多い。スノッパーは三八豪雪前後から普及し始め、大きさにより屋根雪用や玄関周辺等の排雪用などがある。なおスノッパーは、白山麓では吉野谷村中宮で最初に実用化された。

b. 他の雪にかかわる生活用具

除排雪器具の他に、冬の外出時の衣装・履物も代表的な雪にかかわる生活用具である。外出範囲や男女別、また雪の状況によってもこれら衣装・履物は少しずつ異なっていたので次に紹介する。

外出先が集落内で、日常使っている生活道路を歩く時、つまりそれほど危険性のない時にはフカグツをはいた。また、毎朝雪踏みする時に、新雪の量がそれほど多くない時にはフカグツで雪を踏んで道をつくった。新雪が一晩に一尺（約30cm）以上積もった時には、ミチフミフカグツ（またはナガフカグツともいう）をカンジキと一緒に使った。

フカグツを履く時には、一つかみワラスベを底に入れ、その上にナカジキ（中敷）を置いてから履いた（足には足袋を着用）。これは、足袋の裏にワラスベがついたまま家に上がらないようにするためであった。

外出先が集落よりも外の場所へ行く時、例えば隣村に用事がある時や山へ猟をする時には、キビシヤテ（コウカケともいう）をカカトに付け、ガマハバキを膝下に巻き、シャナガミ（またはズボロ）を足先に履き、ユキワラジを履いてカンジキを着用した。冬に集落外に出る時には、たとえどんな晴天であってもいつ天气が急変するかもしれないので必ずミノを持っていき、頭にはシナで作ったオオボウシをかぶった。また雪目になるのをふせぐためにユキメオオイを着用した。

尾添では昭和にはいってからゴム長靴が少しずつ見られ始め、次第にユキワラジに取ってかわった。桑島ではユキワラジは昭和30年代に、フカグツは昭和40年代にそれぞれ使用されなくなった。ユキワラジは普通一冬に1～2足、猟師（鉄砲撃ち）で同4足を使った。

カンジキは目的や雪の状態によって使い分けられた。最も大きいのはオオカンジキ（アワカンジキ）で、急用・非常用に使われた。チュウカンジキは道踏みなどに、ショウカンジキは普通に歩く時に使われた。猟に行く時にはチュウカンジキとショウカンジキを両方持っていき、登りの時にショウを、柔らかい新雪を歩く時にはチュウを使った。また3月過ぎて凍った根雪の上で作業する場合、例えば猟や春木山で手ゾリを使う時にはユキワラジの下にカナカンジキをつけた。よほど多量の新雪が降った場合には、オオカンジキとショウカンジキを重ねて着用し、雪踏みに使った（白峰の場合）。尾添・中宮では、猟や春木山などの野外作業時には、ツメカンジキを使用した。なお、白峰村赤谷の永住作り地におけるフカグツとカンジキの名称・用途の一例は次のとおり。

- *アワカンジキ（新雪が大量に降った時に道踏みに使用）
- *チュウカンジキ（新雪が50cm位の時にナガフカグツと一緒に使用）
- *ナミカンジキ（普通の雪の時に使用し、女性がよく使った）
- *カテカンジキ（春先の雪が凍っている時の野外作業時に使用）
- *カナカンジキ（3月中の早朝、凍結斜面で作業する際にユキワラジと一緒に使用）
- *チュウフカグツ（少し遠い所へ行く時に使用）



スノッパー（中宮）

*フカグツ（普通の道、生活道路を歩く時に使用）

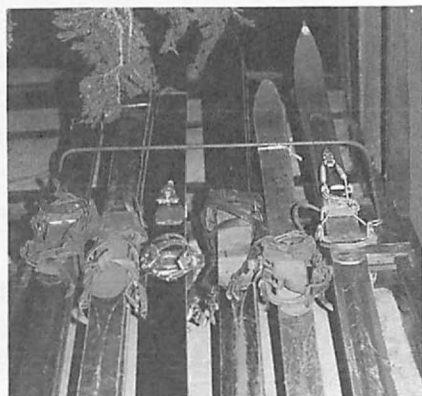
c. 雪遊び用具

雪遊び用具で代表的なのはソリ（ジョリ）とスキーである。桑島では栗材（腐りにくい）を使ってソリを作り、尾添では普通のソリの他に箱ソリがあった。現在では全てプラスチック製のソリが使われている。

白山麓はスキーの盛んな所だけに、古くからスキー造りやスキー遊びが行われた。白峰では昭和初期すでにスキー大会が行われたようで、この頃村内にスキー製造者がいた（昭和9年の大水害で村を出るまで造っていた）。スキー材料はハンサ（ミズメ）、トチ、ケヤキなどが主で、キハダもしなやかで適していた。スキーの先端部は、イロリの灰汁を煮た中へ入れて曲げた。4か所の調査地とも昭和10年頃にはすでにスキーが行われていて、手造りのスキーが多かった。スキーの際には、ゴム長靴またはフカグツを履き、金具でクツを止め（麻糸縄の場合もあった）、当初はストックなしまたは1本ストックで滑ったこともあった。白峰では、大正の頃越後高田連隊にいたことのある村出身将校がスキー技術を村に伝えたそうである。

この他に、古ゲタの裏に割った竹をはめ込んで作った手製スケートもあり、氷の上の遊びに使われた。これは大日川上流で見られ、3月頃水田に湧き出た清水が凍ると天然のスケート場になり、子供達は手製スケートで遊んだものである。

なお、雪遊びとしては、雪小屋（かまくら）作り、雪合戦、雪の落とし穴（おちんこ）作り、相撲（雪の上）などがあった。最近では、昔ほどこうした雪遊びをしなくなり、特にスキー場が整備されてからはスキー・ソリ遊びが主体である。



戦前の手製スキー

(2) 冬の仕事

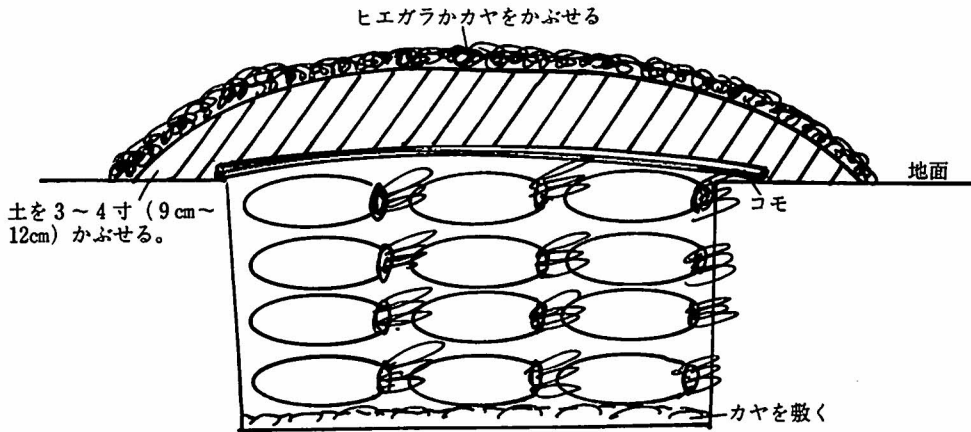
①冬じたく

冬じたくとしては、越冬食糧の仕込みや雪囲い、薪の準備などがあった。越冬食糧の必要性が高かったのは、大体昭和40年頃までで、それ以後は冬期間も道路が確保されるようになったために、あまり必要なくなった。冬の食糧を仕込むのは大体11月中旬頃までで、保存食はダイコン、山菜、魚（ニシン・イワシ・マス）が主であった。ダイコンは各種漬物（切り漬・なんば漬・たくあん漬等）にしてムロ（室）に保存したり、丸のまま野外の穴で100貫（375kg）くらい保存したこともあった（図）。フキ、ウド、ゼンマイ。ギボシといった山菜は、昔はほとんど天日乾燥によって保存食としたが、今は塩漬けが主である。ニシンはダイコンと一緒に塩漬けし、ニシンダイコンにした。白峰村赤谷の出作りでは、ニシンを4貫買ひ、3貫を漬け、1貫をコブ巻にして保存食とした。春先には、イワシをコンカ（小糠）に漬け込んだコンカイワシを作り保存食とした。白峰村の永住出作りでは、秋のうちにコメを運んでおき、報恩講などに使った。これをアキゴメといった。

総じていえるのは、ダイコンの重要性和、塩を利用した低温発酵を主体としていることである。ナナギによるダイコン栽培や、冬期の低温、積雪という山麓の特徴を生かした保存食といえる。

雪囲いは11月始めころから4月までされており、カヤで囲う場合（主として出作り地）とスギ板で囲う場合があった。尾添ではカヤの場合、毎年一戸あたり70～100束必要であった。

薪の準備は10月下旬から11月中旬頃までに済ませた。春木山（後述）によって春先に山に集めてお



図II-2 ダイコンの貯蔵ムロ

いた薪(各種雑木、杉など)を、秋に家に運んだ。薪の置場所は各家の玄関脇などにあり、一坪で100束置いた。出作り地では、春から秋にかけての山仕事の往き帰りのつとに木端や枝を拾い集めておくことがあった。灯油やガスが普及し始めた昭和30~40年代になると、イロリをあまり使わなくなり、それとともに薪の消費も少なくなった。自分の山を持っていない人や山仕事をしていない人は、薪を買っていた。

②出稼ぎ

冬の深い雪に閉ざされる白山麓地方では、かつて出稼ぎは冬の重要な生業として生活の中に組み込まれていた。

出稼ぎ期間は11月中・下旬から4月までで、出稼ぎ先は主に京都・大阪方面が多かった。尾添では慣例として、12月9日の山祭り以後は全部出発し、4月25日の春祭りまでには全部帰るようにしていた。年齢は15才から45~50才くらいまでで、職種は男では店員、車夫、風呂屋、杜氏、女は子守り、機織り、女中などであった。中宮・尾添では昭和10~15年頃まで、白峰・桑島も終戦ころまで出稼ぎをしていたが、以後は無い。

③冬仕事(屋内)

屋内の冬仕事は大体、日常生活用具の製作が主であった。ワラ仕事が多く、ナワ・荷ナワ・ワラジ・ゾウリ・テゴ・ムシロなどの他に、イズミ・シブタ・ワラカビなどの特殊なものも作った。ドウランやテゴは春先に雪の中へ放っておき、丈夫でしなやかにしてから使用した。材料のワラは各村内の米作農家から購入する他、白峰村では勝山方面からも買った。以上のワラ製品は大部分は自家用に使われたが、一部は換金された。ワラジは大体、2日に一足必要とされた。白峰のワラジ作り経験者によると、一冬でワラジ60~70足、雪ワラジ30足を作った。1日当たりでは、雪ワラジ3足、半日でワラジ2~3足を作ったという。

現在ではこれらの製品はほとんど使われていない。中宮では終戦直後まで各家で冬に作られていたし、桑島では老人は昭和40年代までフカグツを主に利用していた。他の村も大体同様で、一部を除いて昭和20~30年代でほぼ役割を終えた。

ワラ以外の材料・製品としては、ミノギから作ったドミノ(ミノ)、シナノキやガマで作ったシナハバキ・ガマハバキ、アサからヌノ(布)、カヤから炭俵などを作った。ドミノは白峰村の大道谷が

主産地で、カッププが出回る昭和30年代までよく作られた。大道谷の某家では年間100着作り、勝山方面へ売った。作り方は、ドミノ用に栽培したミノギ(草)を秋に収穫し、ツチで打ったあと煮て、10日ほど霜にさらして白くして、そのあと干してから冬に織った。



テゴ



フカグツ作り

シナハバキは夏用で、田植の際のヒル防止に役立ち、尾口村釜谷が、またガマハバキは冬のハバキで白峰村下田原が、それぞれ主産地であった。両者とも、繊維分を煮る際にイロリから出る灰(ナラヤブナなど)で作った灰汁で煮た点がドミノ作りと大きく異なる。大体昭和20年代まで作られた。

アサから作るヌノ織りは冬の間の女性の代表的な屋内仕事であった。アサは春に種をまいて夏に刈り取り、麻むし釜で蒸してから乾燥→水さらしを繰り返して、細かく裂いてからつなぎあわせ糸車でよりをかけてカセ(栴)にして、小松・鶴来方面の業者に畳オモテの材料として売った。更に織物にするには、カセにしたものを灰汁で煮て雪にさらし、これを機織りで織ってまた雪でさらしてでき上がった。ヌノは夏の作業着に適しており、大体昭和20~30年ころまで作られた。アサの代わりにオロ(アカソ)やイラ(ミヤマイラクサ)も使われた。

他に、ガマを使ったタミノ・シブタ、ヘジナ(モミジ類の樹皮等から作った材料)細工によるナタカゴ、クロモジから作ったカンジキなどが冬の屋内作業でできる製品であった。

④冬仕事(屋外)

a. 狩猟

冬の狩猟獣はノウサギが代表的で、猟の方法は銃・ワナ・シブタトリ(またはバイウチ)の三種類ある。近年は銃猟がほとんどであるが戦前にワナ猟とシブタトリがあった。ワナ猟は、ウサギの通り道にクリワナとエサを付けて捕獲する方法である。シブタトリはシブタを投げて鷹の飛ぶ音を発生させて、ウサギが雪穴に逃げ込んだところをつかまえる方法である。白峰村大道谷では、昭和20年代、一冬に何百羽ものウサギを捕獲したこともあったそうで、正月には欠くことができない冬の御馳走であった。その頃白峰の商店ではウサギ肉を販売していた。近年は数が激減し、一冬に数羽しか捕獲できない。

春先4月になってクマが冬眠からさめるとクマ猟が始まる。伝統的なクマ猟の方法は10人くらいまでの組編成による巻き狩りが主である。尾添では討手2~3人、追手5~8人であった。白山麓には古くは、「クミモト(組元)」又は「シコミヌシ(仕込主)」といった元締めがいた。クマ猟に必要な物資(食糧その他)を提供して猟師組を組織し、獲物(クマ)の配分を受けたもので、市ノ瀬・牛首・尾添・中宮に明治の頃まであったとされる。市ノ瀬の古老(故人)によると、祖父の代(明治・江戸末期)には10日くらい泊まりがけてクマ撃ちに行き、食糧はコメ1升/日、ミソ(コメ1斗に

ミソ2升の割合)、ホシナ(干し菜)を携帯したそうである。捕獲したクマは、現地で解体して村まで持って帰る場合と、村まで引っ張って帰って解体する場合、また一人で撃った時には持って帰れないので谷間の雪の中に埋めて翌日何人かで村まで持って帰る場合があった。

クマを狩るのは、1960年代中旬までは村田銃・散弾銃が使われていたが、それ以後はライフル銃である。狩猟は各猟友会ごとに行われるが、近年は狩猟従事者が著るしく減っている。昭和45年には白峰・桑島合せて約70人の猟師がいたが現在では11人に減っている。

b. 春木山

秋の間に、作業予定の山に前もって食糧を運んでおき、十五日節句(2月15日)が過ぎると山入りした(桑島、昭和40年頃まで)。一度山入りすると仕事が終わるまで(3月中)帰らなかった。大道谷のように雪深い所では4月頃まで続けられた。春木山で伐採され、手ゾリで運び出された木材(スギ・ブナ・雑木など)は、昔は春先の雪解け水で川流しをした。桑島では昭和30年頃まで、白峰では戦前まで川流しが見られた。なお、前年の秋に木を伐採して山にまとめて積んでおく場合もあり、この時は木材の上にカヤ屋根をかけた。

一般家庭の薪は前年の秋に伐採して春に雪の上を手ゾリで運び出した。桑島ではほとんどの薪が共有地から供給されたが、その伐採場所や量は決められていた。薪の量は1戸当り1間半と決められていた。1間というのは、長さ3~4尺(約0.9m~1.2m)の薪丸太を6尺(約1.8m)幅に並べ、それを6尺(約1.8m)の高さ(=1間)に積み上げた量である。



春木山(白峰村)

2. 伝統行事・慣行

(1) 共同作業

村落共同体意識が強かった白山麓山村では、結(イイ)によって各種共同作業を行った。以下、共同作業の概要を紹介する。なお、「冬の生活」で除雪についての共同作業を取り上げたので、ここではそれ以外を対象とした。

① 屋根葺き

屋根葺きの材料は、かつてはカヤが大部分で一部栗コバが見られた。中宮では昭和30年代、尾添では昭和20年頃、桑島では昭和40年代にカヤ屋根は消滅した。白峰では本村内で栗コバ屋根が多かったが、出作り地ではカヤ屋根が普通であり、現在残っている出作り住居はカヤ屋根である。

カヤ屋根の葺き替えは大体15~20年に一度行ない、人数は20人から多い時で50人(尾添の場合)くらい必要であった。人夫は親戚や村内の人に来てもらうことが多く、朝・昼・夕三食の賄いと酒が付いたが金銭による謝礼はしなかった(中宮・尾添)。屋根の葺き替えは典型的な共同作業の一つであり、カヤ



カヤ屋根一下田原の出作り

屋根が大部分を占めていた時代には、いつかは自分の家も葺き替えてもらわなければならなかった。それ故、屋根葺きの人夫賃はいらなかった。また、賄いの食事や酒の席では参加者同士が親睦を深め、情報交換や相互理解にも役立った。

②建前

家を新築した時の建前は、親類縁者を中心に行われる。尾添では祝酒を2升持参し、親戚の者はその他に料理の手伝いをした。謝礼は無く、赤飯・おむすびのコビリ（小昼）、昼食、夕食（酒付き）の賄いが付いた。中宮では自発的に行った場合は昼・夕食が、頼まれた場合は三食付いた。桑島では昭和52年のダム水没・移転時に全戸新築して以来、10年間建前をしていない。

③田植え

田植えも結によって行なった。大体5月に田植えをしたが、田の大小により前もって人員を決めて用意しておいた。白峰のある家の水田では5反で15人頼んだ。尾添ではボタ餅のコビリと昼食が付き、昭和45年頃までは盛んに水田耕作が行なわれた。

④道人夫（道打ち）

白山麓では、雪が解けて春になると道の補修をするために道人夫による道打ちが行われた。桑島では毎年4月27日に集落内の15～60才の男子全員が道路補修に出た。ダム移転以後は、区役員が責任者となって区割りをした。中宮では4月中旬以後に、区割りをして道路補修をしている。尾添では5月上旬に村中総出で冬期破損した箇所を補修したが、昭和50年頃より道路事情が良くなったので実施していない。なお、8月中旬のお盆前、集落を8班に分けて担当地区を決め、道路の草刈りをする。白峰でも近年道路事情が良くなっているので道人夫はしない。村道は、その道を利用している人が草刈り、溝掃除をしている。

⑤用水人夫

中宮では雪解け後に区長の責任で用水を補修し、その後は水田所有者が管理する。6月末頃用水の草刈りをする。尾添では5月初旬に用水の清掃をして水の流れを良くし、また冬期の破損箇所を修理する。水田のある猫ヶ島地区・耕地整理地区両者の代表がそれぞれの責任者となって用水管理をする。白峰では、流雪溝の利用者が1戸から1人出て、春と秋に清掃・補修する。

⑥共有林の管理

桑島では昭和26年以後、毎年9月8日の午前中を愛林日と決め、区の共有林に杉を植林したり下草刈りをした。しかし、下草刈りの時期としては遅いので、その後7月18日（白山祭）の午前中に変更した。ダム移転以後は行なわない。

⑦防火・防犯（火の番）

白山麓の村々の中にはこれまで大火の経験が少なくなく、防火には集落ごとに細心の注意が払われている。また、治安の良さを保つためにも防犯意識も強い。これらのことから、現在でも火の番が熱心に行われている。

中宮では1戸から1人ずつの2人組で火の番をする。一般に各家で一番元気な者が出るようになっていて老人と子供は参加できない。鋤丈と拍子木を持つ。見廻り時刻は午前7時・10時・午後1時・4時・8時の1日5回ある。朝の7時だけ（昔は夜の8時も）集落内の全戸を廻り、他の時刻は道順が決まっている。尾添では昭和50年頃まで1日7回（午前8時・10時・正午・午後2時・4時・6時・10時）、現在では1日3回（午前10時・午後3時・10時）あり、集落内の地区ごとにそれぞれ輪番制で行なわれている。拍子木を使用する。桑島では、古くは昼夜11回あったが、昭和40年頃から午後9時・午前0時・2時の3回となった。近所の人と2軒1組一緒になって、拍子木を叩いて決められたコースを廻る。白峰では昭和50年頃まで2軒1組で1日10回、午前7時から大体2時間間隔で午前

4時まで、集落の端から端まで廻った。現在は、集落内の北番と南番（林西寺を境として北側と南側）それぞれの地域内を4、5人で1日2回（午後7時と10時）廻っている。

なお、4集落とも春の雪解けから晩秋の初雪の頃まで火の番を行い、雪が積もる冬の間はしていない。

⑧ナギ畑の火入れ

ナギ畑の各種作業の中で火入れは最も人手を要したので、出作り地での隣近所（ヤマドナリ）や親戚に手伝ってもらった。謝礼は無しで昼食が付いた。安全管理の上からも、作業は一日の明るいうちに終えなければならず、午前9時前後から午後4時頃まで行われた。手伝いの人数はその家の家族数やムツシの広さによって異なるが、4～5人（桑島の例）から6～8人（尾添・中宮の例）であった。

(2) 宗教行事

浄土真宗の信仰心の厚い土地柄を反映して、各村では種々の宗教行事が行われている。ここでは、浄土真宗関係の行事を中心に紹介する。

①報恩講

親鸞上人の教えを聞く聞法を行ない、親戚・知人同士の交流を深めることにより人間関係を豊かにし、また年に一度の御馳走をいただくために、お講を開いた。これが報恩講であり、各家持ち回りでやっている。

報恩講は、山仕事が終わる晩秋以後に行われた。中宮では11月中旬から12月28日頃まで、尾添では12月初旬から12月21日のお七夜の入りまでに催された。これに対し、桑島では12月から3月の間に行なわれた。白峰では昭和30年代までは、11月上旬から12月上旬までは（永住）出作り地で、12月上旬から2月頃までは本村で行われた。雪の少ない内に、寺の坊様が各出作りを回れるようにしたために、こうした日程になった。

報恩講の内容は、お参り・お勤め（仏前でお経を唱える）、お齋（精進料理をいただく）、法話（坊様の話）、解散、という手順で行なわれる。時間は場所・家によって異なるが、大体午後には始まり晩方には終わる。例えば、白峰のある家では午後0時から3時頃まで（昔はもっと遅くまで）、尾添では午後2時から（親戚以外の人については午後6時半頃から）8時頃まで行なわれている。

食事は精進料理が出され、その材料は地元の山で穫れた山の幸が主体である。これら山の幸は、春から秋まで山で仕事している間に心がけて報恩講のために採集しておく。桑島の例でいうと、・アズキのぼう（あずきを台形の箱に詰め、押し抜いたもの）・なます（ダイコンとニンジンをませ、柚子を添える）・あえ物（ゼンマイのクルミあえ、ウドのカラシあえ、ギボシのマメノコあえなど）・煮物（フキ、ゼンマイ、ワラビ、ギボシ、ゴボウ、ニンジン、ジャガイモ、サツマイモ、サトイモ、ヤマイモ、マイタケ等の上に三角ドウフをのせる）・中皿（ササゲ、マメ、ユリ根、栗、ニカゴ等を煮たもの）・四ツボ豆腐（豆腐四切れ）・御飯　・その他のひき物（あえ物、煮シメ、ナンバ漬、漬物など）・ミソ汁（ダイコン、トウフ、ナメコなど）・茶の子（いり豆、栗、ガヤの実などの上にジャガイモ・サツマイモをのせる。現在は菓子・モチ・ミカンなど）。現在桑島では全63戸のうち51戸が自宅で報恩講を行っている。



報恩講（尾添）

②お仏事（お七夜）

親鸞上人が病気にかかった日から、亡くなる日まで七昼夜あったことから、同上人の徳を慕ってお七夜が各寺・道場で営まれる。内容は、お勤め、お齋、雑談、説教の順であるが、山村社会の変化に伴って簡素化されている。例えば、中宮や尾添では昭和40年代ころまでしかお齋をせず、今は茶菓子を出すくらいであり、全般的には若年層の参加が減っている。

お七夜を行うのは本来、親鸞上人の祥月であった11月21日から28日（命日）までであったが、ナギ畑や出作りが盛んな時代には11月中は忙しかったので12月に行われていた。ところがここで再び変化があり、白峰では出作り従事者が多くいた昭和40年代までは12月23日から28日までであったが、大道谷・河内谷等の出作りが激減して村外へ出てからは、10月上旬に村外在住の門徒を、年が明けたでは1月23日から28日までは村内在住の門徒を対象として、それぞれの寺で行われている。これも最近2日間だけになり、1月27・28日の両日になっている。

また、尾添・中宮ではスキー場が開設されてから12月が多忙になり、それまで12月に行っていたのが11月が変わった。尾添ではスキー場が開かれた頃（昭和52年前後）までは12月21日（お七夜の入）・25日（中入）・27日（連夜）・28日（日中満座）の4日行なわれていたが、以後、中入を行わなくなり、3～4年前にはスキー場の営業等で年末が多忙なために、11月に移され、それも21日と27日にまとめて行なうだけになった。

中宮も同じく日が変わった。昭和59年のスキー場オープンまでは12月21日から28日まで行われていたが、それ以後は11月21日から28日までに変わり、しかも最近では夜2時間ほどお勤めをして茶を飲んでおわりという場合が多い。

この様に、浄土真宗の信仰心の厚い白山麓であっても、山村社会の変化に伴って宗教行事は影響を受けている。

③お講様

親鸞上人の命日の28日と前東本願寺門主の命日の6日に、毎月寺・道場にお参りをすることをお講様という。朝1時間ほど、各家から門徒が集まりお勤めをしているが、お七夜と同じく簡素になっている。尾添では戦後はお齋をしなくなった。全般的に年配の者の参加が多く、若い人はあまり出ない。

(3) お祭り・年中行事

娯楽の少なかった白山麓山村では、各種祭りは数少ない楽しみであった。年間を通してかなりの数の行事があった。ここでは代表的なものを紹介する。

①春祭り

雪がそろそろ消える頃に開く祭りで、大体4月末頃行なう。中宮では4月26日～28日が春祭りで、28日は同時に鎮火祭（昭和20年中宮大火）も兼ねている。26日には箆笠中宮神社に神主が来て、28日には自警団・消防団が各家を回って消化器の点検等をする。桑島では4月28日～30日に行われていたが、ダム水没移転以後は4月28日・29日になった。28日午前中は、各戸から1人出て神社境内と共同墓地の清掃をする。夜は神社の境内で踊りが立つ。ダム水没以前は夜店も出ていたが、今はあまり夜店はない。尾添では4月25日の蓮如上人の命日と翌26日に春祭りを行なう。お宮の清掃をしてお参りする。



獅子舞（中宮）

②白山祭り

泰澄大師の白山開山を祝って7月18日・19日両日、白峰と尾添で行なわれている。白峰ではカンコ踊りを踊り、夜店が出て盛大な祭りが行われている。元来は河内谷の市ノ瀬方面の祭りであった。尾添では数年前から一里野地区で踊りや各種行事が白山祭りとして行われている。

桑島では昭和45年頃より白山祭りが行われ7月18日は休日となっている。午前中は愛林日として共有林の手入れをした。

③秋祭り

秋祭りは終戦頃まではお盆と一緒に行われていた。中宮では9月7日～13日まで、尾添・桑島では9月8日から12日まで、白峰では9月10日から14日までであった。この期間は、出作りに山に行っていた人も村へ帰ってきて、踊りや法楽相撲（桑島・白峰）が行われた。中宮・尾添では獅子舞が現在でも何年かおきに行われている。戦後になるとお盆は7月または8月に行われ、秋祭りとは別々になった。

④山祭り

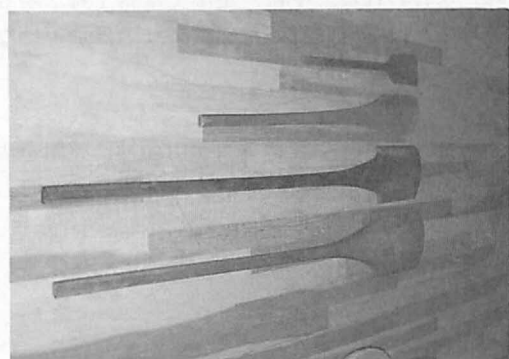
主に山を仕事の場として山から収入を得ていた人達、つまり炭焼きや製材業者が山の神に感謝を表わす祭り。3月9日と12月9日の2回あり、この日は仕事を休んで雇主の所で酒宴を開く。この日、山に入るとケガをするという言い伝えがあった。



ゴザボウシをかぶって雪道を歩く



道踏の順番



各種コシキ



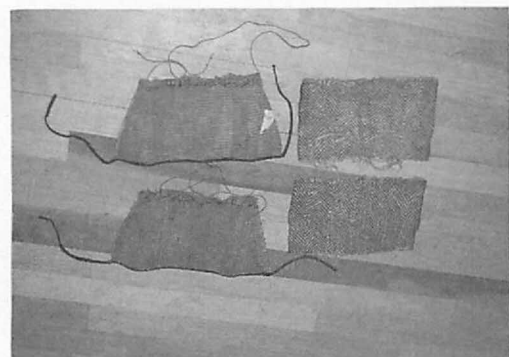
ミチフミフカグツ (左) フカグツ (右)



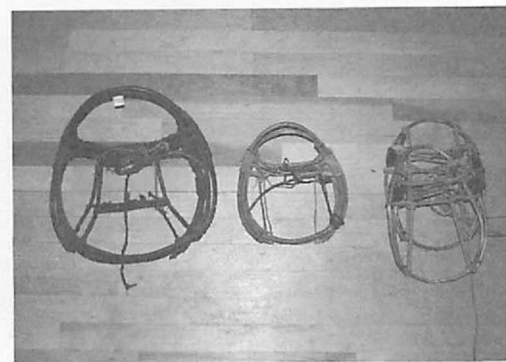
ユキワラジとシャガナミ



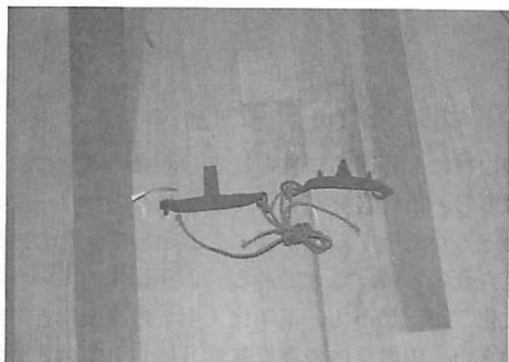
ズボロとワラシキ (下)



ガマハバキ (左) キビシャテ (右)



アワカンジキ(左) チュウカンジキ(中) ツメカンジキ(右)



カナカンジキ



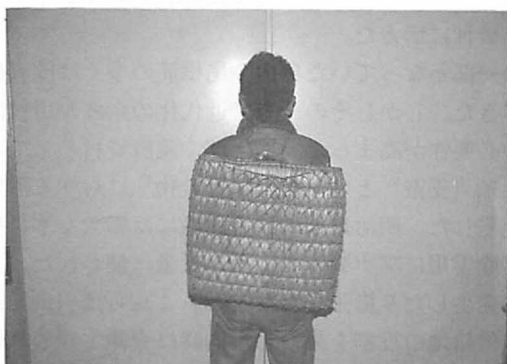
ユキメオオイとオオボウシ



ドミノ



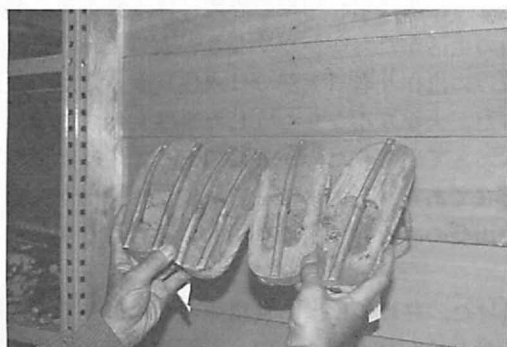
猟の装束 (冬)



リョウタミノ (網の中に獲物を入れる)



各種ソリ



手製スケート



雪小屋 (かまくら)